

## ■ 特定課題セッションⅧ 報告

### 「福祉は『これからの正義』をどう語るべきか

#### — 福祉教育における価値と倫理の教育の在り方を問う—

コーディネーター：妻鹿 ふみ子（東海大学）

コーディネーターが、このセッションを企画した意図は、思想や価値を問い直す社会福祉教育の重要性を問題意識として持ち、社会福祉の理論をもっと深く思考すること、それを実践に落とし込むことのできる授業をデザインすることについて、「あるべき論」だけではなく、「できる論」まで射程に入れて議論をすることにあつた。この意図を汲んで応募していただいた3人の会員から、以下のような発題をしていただいた。

志水幸会員からは、社会福祉学の教育課程において、価値と倫理という原理的課題が適切に位置づけられているかを問い直しつつ、教養教育と専門教育の接合をはかることの重要性、また、本来相容れない分配的正義、交換的正義という異なる規範が併存する福祉教育の体系をどのように内面化、統合化させて、専門職としてのアイデンティティを学生たちに身につけさせることができるのかについての刺激的な報告があつた。

岡崎幸友会員からは、「理論」をどう実践するか、という視角から、応用倫理学の枠組みに依拠し、社会福祉を支える理論を実践においてどう具現化するか、あるいは思想や理論と実践が結びついたといえる根拠はどこにあるのかという問いに応えつつ、学習した思想や理論と思想を活用する教育の重要性について、議論のきっかけをいただいた。

最後に内田充範会員からは、「思考型」授業のデザインについて、1つのモデルを提示していただいた。「思考」をするための授業の組み立てとして、グループディスカッション→新聞記事レポート→プレゼンテーションという3つのステップによる授業デザインを展開し、それによって学生がどのような力を得たのかを問うコンピテンス評価から一定の方向性が見られたことの報告をいただいた。

以上の報告に対して、具体的なもの、エビデンスを積み上げていく実践の客観性を問いながら、自己決定、市民社会原則などの近代の規範を理論として組み入れていくことが思想を活用する教育といえるのではないかといった論点からの議論や、自分のこととして他人ごとであるとならえることを可能にする教育は、思想の力を借りつつも可能なのかといった議論が展開された。また、社会福祉士教育としてのカリキュラムポリシーを踏まえつつも、実践者としての力量を身につけたことのコンピテンス評価をめぐる議論も交わされた。

全体としての議論が思想、理論中心になり、やや難解だった側面もあり、参加者との積極的な議論が十分にはできなかったことがコーディネーターとしての反省点である。しかし、価値と倫理の教育によって、理論を実践力につなげることの重要性を改めて確認することはできた。しかし、その具体的な授業デザインのあり方についての議論の展開には至らなかった。今後の課題である。